IKGの
旅館経営再生塾
第95回
変革は経営者自身から

執筆担当者
孫田　猛

旅館経営において常に変化をし続けることの重要性については幾度となく論じてきた。

旅館経営者の方々からも、「このままではとんでもないことになる。何とかして経営そのものを変えて行きたい」という声を毎日のように聴いている。

危機意識は多くの経営者が持っている。しかし、何をどうしたらよいのかが、自分ではよくわからない、という相談も多い。

コンサルタントという立場で、そのような悩みを持つ旅館に伺って内部を調査してみると、たしかにその経営者の言うとおり、経営の方向性も、組織そのものも硬直しきっている場合がある。

そして経営者は、この状態から脱却するための具体的な方策を即求めてくるのである。

しかし、その前に大切なことは、その硬直化の原因は何かを明らかにし、根本原因を取り除くことができない限り、解決はしないということである。

経営者の目から見て、顕在化している問題を解決したいというのはよくわかる。また、問題の原因も、その目線の先にあると疑ってかからないのも理解できる。でも、結構多いのは、問題の根本原因が指揮官である経営者自身であることだ。

これは一歩引いて冷静かつ客観的な視点からみれば、よく見えてくるものである。

我々はコンサルを依頼された経営者からまずヒアリングをする。そして、その言葉をインプットしたのちに現場を見ることになるから、この点に関してはすべてを鵜呑みにしないよう気をつけなければならないと認識している。

基本的には同族経営であり、トップの力量がそのまま結果となって反映しているのが旅館経営である。だから経営者の力量以上にも以下にもならないと見るのが正解のようだ。

ところが経営者に対して、回りは誰もその欠点を直接指摘しようとはしないし、また本人もそのことには全くと言っていいほど気づいていない。同族経営なのだから、遠慮なく話すことができる環境なのにと思っても、経営者は聞く耳を持っていなかったりする。

旅館全体として危機意識を感じたら、まずもって経営者自身が誰よりも早く、身をもって変革の実践を示すこと。これが大事なことだとつくづく感じる毎日である。

http://www.ik-g.jp
e-mail:mag
ota@ik-g.jp